

**インプット・アウトプット・アウトカム評価 (IOO 評価):
都市における共助・協創のための縁づくり・場づくり支援 NPO 活動の
業績評価手法の提案及び有効性検証***

Input-Output-Outcome Review (IOO Review): Modelling the Performance Review Method
for NPOs' Activities to Support Social Networks and Platforms Co-creating and Co-
supporting in Urban Cities, and Validating Its Efficacy

坂倉 杏介[△]・前野 隆司[□]・加藤せい子[□]・林亮太郎[□]・三田 愛[□]・保井俊之[□]
SAKAKURA Kyosuke, MAENO Takashi, KATO Seiko,
HAYASHI Ryotaro, SANDA Ai, YASUI Toshiyuki

1 はじめに

(1) 研究の目的

本研究は、社会活動を行う団体の様々な活動を評価する際に、成果 (outcome) を定性的・定量的に可視化し評価として活用できるワークショップベースの自己評価フレームを「インプット・アウトプット・アウトカム評価 (IOO 評価)」として構築して提案するとともに、都市型の地域の縁づくり・場づくり団体¹⁾による地域住民・行政・団体間の対話によるつながり構築を事例に、その有効性を定性的及び定量的に検証することを目的としている。都市型の地域の縁づくり・場づくり団体とは、都市部を活動基盤とする地域コミュニティの共助・協創のための人的ネットワークや交流プラットフォームづくりを支援する NPO 等を指す。

(2) 都市型の地域の縁づくり・場づくり団体の現状と課題

都市型の地域の縁づくり・場づくり団体は、都市における多世代の共存・交流・協創を生み出し、多様な主体間のつながりと生き甲斐を住民に実感させるオープンな縁づくり・場づくり活動を行っている²⁾。他方でこれら団体は、地域に提供する価値が特定のサービスではなく、自らの活動成果の可視化が困難という課題を抱えている。すなわち、自らの団体の活動のインプット、アウトプット並びにアウトカムを一体的に評価することができず、活動に対する資金提供者であることが多い行政機関等に、うまく政策評価をフィードバックできないことが多い。この課題は、団体の運用資金不足や質的發展の阻害を生み出し、持続的な成長を阻む障壁にもなっている。

都市型の地域の縁づくり・場づくり団体に対する行政の政策評価のアプローチも近年変化を見せている。活動のアウトカムを重視した業績評価が浸透し、評価指標の構築手法の研究も進展している。社会的活動を行う NPO や企業の業績評価と

* 本稿の主題は関東都市学会春季大会(2015年5月30日)で報告した
本研究は JSPS 科研費 15K00679 及び 15K11973 の助成を受けた

本稿の図表類はカラー仕様の原稿で投稿され、受理されたものである

[△] 東京都市大学都市生活学部、[□] 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科、[□] NPO 法人吉備野工房ちみち、

[□] リクルートライフスタイル事業創造部じゃらんリサーチセンター

Corresponding Author: t.yasui@z2.keio.jp

しても、社会的投資利益率 (SROI) で測る考え方も徐々に普及している [e.g. Arvidson et al. 2010]。他方、都市型縁づくり・場づくり団体の多くが規模の小さい NPO 等³⁾であり、SROI をはじめとする既存のアウトカム評価手法の導入及び適用は困難と考えられる。したがって、これら団体が自らの活動のインプット、アウトプット並びにアウトカムを一体的に、かつ相互に関連づけつつ、可視化できる簡便かつ汎用性の高い評価ツールを開発する必要がある。

2 研究方法

(1) 分析の視角及び先行研究

本研究の分析の視角は、都市活動を中心とする社会団体活動等を巡る三つの学術的新潮流を反映したものとなっている。三つの新潮流とは、①都市ガバナンスにおける、地域の縁づくり・場づくり団体が創出する公共価値の社会ネットワークの意義、②都市政策や地域活性化に関する政策立案及び評価へのシステムズ・アプローチの導入、並びに ③地域住民の縁づくり・場づくりの場を構築する NPO 等の中間支援団体への政策形成・実施主体としての社会的注目、の三つである。

1) 都市ガバナンスにおける公共価値の社会ネットワークの意義

第一の都市ガバナンスにおける、地域の都市型縁づくり・場づくり団体が創出する公共価値の社会ネットワークの意義については、New Public Governance (NPG) や Public Value Governance (PVG) と呼ばれる新しい地域ガバナンスモデルの台頭がその背景を成している [Dunleavy et al. 2005; Osborne 2006; Pollitt and Bouckaert 2011]。NPG や PVG のガバナンスモデルでは、行政、住民、NPO 及び企業等のマルチステークホルダーによるコミュニティ活動への自発的参加が公共価値の社会ネットワークを形成し、コミュニティの持続可能性を高めているとされる。いずれも地域コミュニティにおける協創の人的ネットワーク構築に社会的価値を見出すガバナンスモデルである [Bryson et al. 2014: 445-456]。

NPG 及び PVG に対応する地域活動への評価技法の開発も 2000 年代後半から始まっており、地域の価値ネットワーク形成に対する評価技法の提唱も概念レベルではなされている [e.g. Moore 2014: 465-477]。しかし、評価の具体的技法のひとつであるソーシャル・アカウンティングは企業会計のソーシャルセクターへの類推手法 [馬場 2013] であるなど、都市型縁づくり・場づくり団体が生成するアウトカムの把握には限界があると考えられる。

2) 政策立案及び評価へのシステムズ・アプローチの導入

第二の政策立案及び評価へのシステムズ・アプローチの導入であるが、都市政策や地域活性化の政策立案及び評価に関して、システムズ・アプローチを導入する動きが近年見られる [津々木ら 2011; Yasui 2011]。

導入の動機として、貧困や高齢化など相互に複雑に絡み合った都市や地域の社会課題、すなわち ‘Wicked Problem’ [Buchanan 1992] に対応するためには、問題の要素をつながりととらえ、全体俯瞰的な問題解決を提案するシステム思考 [Legasto et al. 1980; Senge 1990]、並びにこれらの問題の解決を実践の中で提案し、解決策を政策設計として社会に実装していこうとするデザイン思考 [Johansson-Sköldberg et al. 2013] のアプローチが適切と考えられていることがある。さらに 2000 年代末からは、システム思考及びデザイン思考を統合した、全体俯瞰的かつ政策設計的な問題解決手法であるシステム × デザイン思考 [Bosch et al. 2013; 前野ら 2014; 保井 2014; Yasui et al. 2014] にもとづく都市政策等の設計提案も行われている。

3) 政策形成・実施主体としての社会的注目

第三は、地域住民の社会関係資本のネットワークを構築し、多世代かつ官民協働の地域活性化の場を構築する NPO などの中間支援団体が、政策形成・実施主体として社会的注目を近年集めていることである [坂倉ら 2013; 2015]。

この社会的注目の政策的現象が、1990年代英国の National Compact や日本の鳩山政権下の「新しい公共」であり、安倍第二次政権下での地方創生政策である。特に 2014 年に開始された地方創生政策については、地方創生の担手の主要プレイヤー、例えば「産学官金労言のハブ」の構築者として、都市型縁づくり・場づくり団体に官民協働の大きな期待が集まっている。なぜならば、都市型縁づくり・場づくり団体が創成する政策アウトカムには、地域の安全安心や幸福感の向上など、地域コミュニティの人的ネットワークにもとづく目に見えない公共価値が多く含まれているからである〔前野ら 2014〕。

(2) 研究方法

本研究は、これらの分析視角及び先行研究を踏まえ、都市型の縁づくり・場づくり団体を典型とする社会活動団体が政策形成・実施主体として、多様な活動で創出するアウトカムを自ら主体的かつ事前知識なしに可視化できるツールを、IOO 評価ワークショップとして開発した。IOO ワークショップは、システム × デザイン思考にその構造の基底を置き、これら団体が創出する公共価値をアウトカムとして、団体内外の主要ステークホルダーが参加して構造化・可視化するプロセスである。さらに IOO ワークショップを実施し、ワークショップ中の参与観察による質的データの収集並びに参加者へのアンケートにより、IOO 評価の有効性を定性的及び定量的に検証した。

3 IOO 評価ワークショップの概要

(1) 特徴と構造

本研究で筆者らが開発した IOO 評価ワークショップは、社会活動団体の事業評価を目的に開発したプログラムで、次のような 3 点の特徴を持つ。

第一に、事業のアウトプットだけではなく、アウトカムにフォーカスして事業を評価する点である。これにより、量的な成果だけではなく質的な効果についても扱うことが可能になり、事業のより本質的な意義を検討することができる。第二に、対話型の評価システムが挙げられる。成果の検討を、助成する自治体職員、参加者、ボランティアスタッフなどステークホルダーとの対話を通じて行うことで、関係者のあいだで事業成果の共通認識が得られるようになる。そして第三に、事業の効果を構造的に理解できるという点が挙げられる。アウトカムがどのようなつながりから生じてきたかを、論理モデル（因果関係ダイアグラム）を用いて地図化（可視化）することによって、単に参加人数や収益の多寡といった量的な把握ではなく、事業全体が生み出すアウトカムを構造的

に理解することが可能になる。IOO 評価ワークショップは、従来の事業評価ではこぼれ落ちやすい質的なアウトカムを、多様なステークホルダーの対話によって構造的に理解することができる手法である。

ワークショップの参加者と内容、その結果得られる成果を図式的に表したのが図 1 である。図のように、IOO 評価ワー

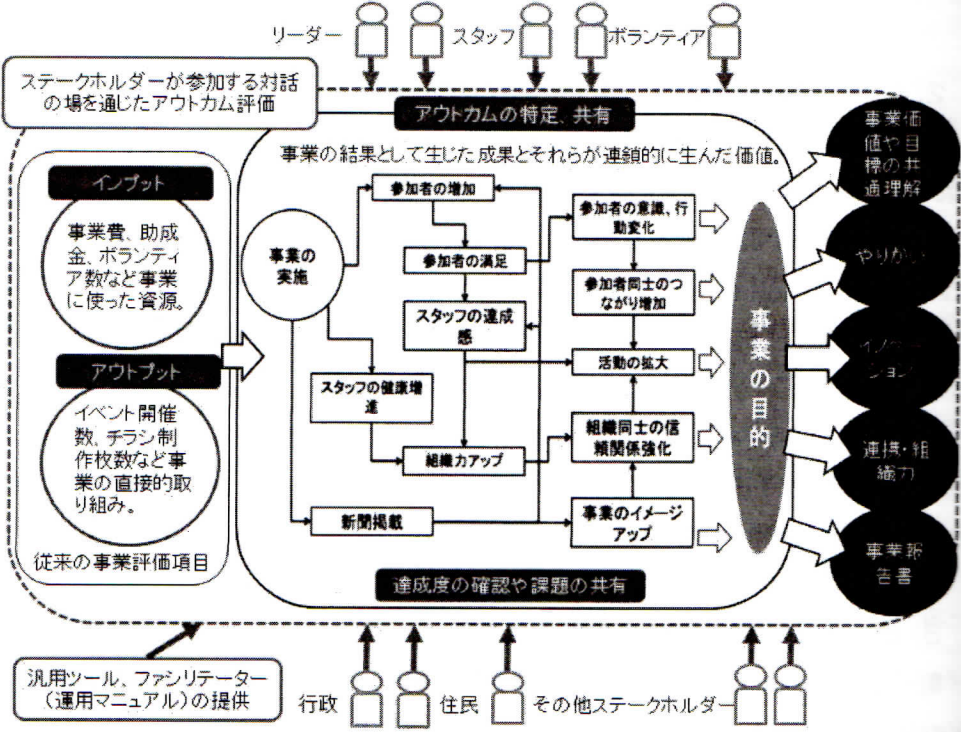


図 1 IOO 評価ワークショップの構造

クシヨップには、事業のリーダーだけではなく、スタッフやボランティアも参加し、また助成元の行政や事業に参加する一般の住民、その他の連携先や協力先関係者も参加できる。多様なステークホルダーが集まり、対話を通じてアウトプットを特定、共有し、達成度や課題を確認することで、事業価値の目標や共通理解、スタッフのやりがい、新しい事業構想への気づき(イノベーションの機会)、組織内の結束力や連携先との関係強化、さらに質の高い事業報告書といった成果が得られるプログラムである。

(2) ワークショップの構成

IOO 評価ワークショップの手順は、以下の6つのステップから構成される。実際にワークショップを開催する際には、この前にプログラムの紹介といったイントロダクションや気持ちをほぐすアイスブレイクなどを状況にあわせて行うが、ここではプログラム本体のみを紹介する⁴⁾。

1) インプットとアウトプットの共有

最初のステップでは、その団体や事業のために「使ったもの」(＝インプット)と「やったこと」(＝アウトプット)を確認する。リーダーに事前にワークシートを渡し、その事業に使用した予算やスタッフ数といったインプット、イベント開催回数やチラシ配布枚数といったアウトプットを記入してもらい、その情報を付箋紙に書きながら共有する。地域活動の現場では、リーダーだけが知っている情報も多いため、このプロセスは活動の全体像の共有にもつながる。また、できるだけ数字で表現することで、例えばイベント開催数や打ち合わせ数など自分たちが感じていたよりも多くの実績があることに気づき、自信が生まれることも多い。

2) アウトカムのブレインストーミング

第二のステップは、アウトカムのブレインストーミングである(図2)。このステップでは、インプットとアウトプットの結果として「おこったこと」(＝アウトカム)を、可能な限り多く抽出する。そのため、ブレインストーミングの技法を用いる。複数の関係者が付箋紙を使って、自分の体感したアウトカムを自由に出していくことで、ひとつの活動が多様な価値を生み出していたことが共有される。アウトカムにフォーカスするため、量的な成果としてはとりあげられにくい主観的な達成感や喜びも多くすくい上げることができる。

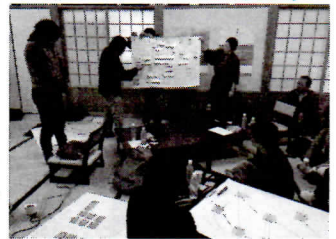


図2 ブレインストーミングの様子

3) 親和図法によるアウトカムのグルーピング

次に、第三ステップとして、ブレインストーミングで挙げたアウトカムを親和図法によってグルーピングする。このステップでは、数多く挙げられたアウトカムのうち、似ているものをまとめ、グループごとに名前をつけていく。初期段階に近いアウトカムから最終目標に近いものまで、また、自分たちにとって良かったことから地域・社会的な波及効果まで、10～15程度のグループにまとめる。

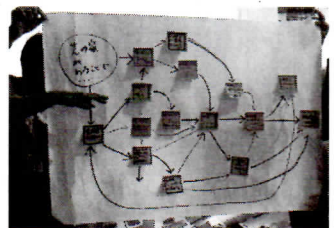


図3 参加者作成の因果関係ダイアグラム

4) 因果関係ダイアグラムによる論理モデル作成

第4ステップは、アウトプットがどのようにアウトカムを生み出していたか、要素間の因果関係を考える段階であり、本プログラムのなかで最も重要な作業である。模造紙の上の付箋紙を移動したりつないだりしながら話し合う(図3)。対話を通じて因果関係ダイアグラムを作成することで、一時的な自分たちにとってのアウトカムから最終的な地域にとってのアウトカムまで、生み出された多様なアウトカムの全体像を構造化して把握することができる。



図4 参加者による発表の様子

5) 因果関係ダイアグラムの発表

続いて、グループごとに作成した因果関係ダイアグラムを発表し、気づいたことを共有する(図4)。どのようにアウトカムを

生み出していったか、そのストーリーが語られることによって、その事業に対する共感が生まれる。同一の事業でもグループによって視点が異なる場合があり、立体的な事業評価が可能になる。また、同一地域の複数の組織や事業をテーマにして開催した場合は、他の組織や活動に対する理解が深まったり、目的や想いについての共感が生まれやすくなる。こうした交流を通じて組織間の連携が高まることもある。

6) リフレクション

最後は、一人ひとりワークシートに記入し、全体で気づきのふりかえりを行う。ふりかえりのテーマは、ワークショップの開催目的や活動のタイプによって、個人的なストーリーを書いたり、インプットからアウトカムまでを数値で表現したり、様々な選択が可能である。

4 IOO 評価ワークショップの実施結果

(1) 開催実績

IOO 評価の有効性検証のため、2014 年 6 月から 2015 年 3 月まで下記 6 都市で 6 回の IOO 評価ワークショップを開催し、延べ 30 の都市型の縁づくり・場づくり地域団体から 143 名の参加を得た(表 1)。

なお計 6 回のワークショップのうち 1 回はタイ王国のスリン県で実施した。日本国内ではない地域コミュニティで IOO 評価ワークショップを実施することで、日本語固有の文脈を離れ、異文化環境においても IOO 評価の枠組みが有効性を持つかどうかテストする意義を求めての実施であったが、後述のように異文化を超えて、普遍的に枠組みの有効性を示す結果となった。

ワークショップ中には参与観察を行い、終了後には質問票を用いて参加者アンケートを実施した。参与観察からは参加者の感想を記録し、質的データとして定性的検証を行った。参加者アンケートからは、定量的検証を実施した⁵⁾。

(2) 参与観察による質的分析

参与観察により得られた参加者の「つぶやき」をすべて文字化し、質的分析を行った。図 5 はその結果を親和図的に表したものである。IOO 評価ワークショップによる参加者の意識変容を抽象化することにより、IOO 評価によって、①これまでの行動の客観化、②自らの活動への自己肯定感、③新たな行動へのモチベーション、そして④ IOO 評価そのものの効用、という 4 つの価値がもたらされることが明らかになった。

(3) 定量検証

参加者アンケートに基づく定量検証を、①総合評価、②アウトカム可視化の有効性評価、③ワークショップ構成の有効性評価、並びに④創造性評価の 4 つの観点で述べる。

1) 総合評価

表 1 IOO 評価ワークショップ開催実績

No.	開催日	開催場所	対象	参加数 (団体・グループ数)
1	2014年 6月1日	岡山県 総社市	県内地域づくり団体	59 (14)
2	2014年 8月27日	タイ王国 スリン県	コミュニティ開発事業参加団体	16 (4)
3	2014年 9月13日	広島県 庄原市	比和自治振興区振興会 (比和自治振興区評価研修会)	25 (6)
4	2014年 12月13日	大分県 大分市	大分みちくさ小道運営スタッフ	9 (1)
5	2015年 2月7日	広島県 庄原市	西城自治振興区 生涯学習事業(市民意識を高めるための講座)	27 (4)
6	2015年 3月30日	東京都 港区	芝の家運営スタッフ	7 (1)

IOO評価によるこれまでの行動の客観化

- 自治振興区22カ所できたが、うまく機能していない。(庄原)
- 行政職員として勤務しているが、自分たちの人件費もインプットのひとつ。(庄原)
- (行政職員が、移住者の幸せのためにやっているんですと発表し、他の参加者がどよめく。)普段は人数だけを求めている。共感が生まれた。(庄原)
- 里山トライアスロン。最初は全国大会開催がゴールだったが、移住を増やしたい、行政の移住政策のチームと目的が重なっていることがわかった。(庄原)
- 区役所内での評価が低い、担当者が適切に広報できていない、とが自己反省。(港区)

IOO評価が新たな行動へのモチベーション

- マーケティングにも活用できることがわかった。(総社)
- 緊急連絡先の指示書はつくただけで安心して、実際に貼られているか確認できなかった。次のアクションが生まれるきっかけになった。(庄原)

IOO評価の効用

- 対話型でアウトカムを特定することで意識が上がる。担当者や手伝う人の温度差が驚く。(総社)
- 複数の活動が一輪にワークし発表できるメリットがある。(庄原)
- リーダーだけが知っていることが共有された。それによって、メンバーそれぞれが活動に誇りを持てた。(大分)
- 全体のまとめをしてコメント、一人一人が気づきを書き留めるのがよかった。(港区)
- 行政の人がいたのでよかった。価値を共有できた。(港区)
- 日常だから、スタッフの目的意識があまり明確でない。淡々とやっている。そんなスタッフが日常の積み重ねがつながりにつながっていると気づく。つながりをつくるというより、結果的につながりができている。(港区)

IOO評価による自らの活動への自己肯定感

- 自らが、自分たちがやった事業をちゃんと振り返って整理ができ、何がうまくいった、何が足りないかが、腑に落ちた。(総社)
- 夏祭りには雨のため体育館でやった。屋内のため住民同士の雑音も減った。助成に難台が集中し例年より販売が増えた。雨天の準備をできてよかった、できてよかったではない気づき。(庄原)
- 自分のストーリーが承認されること、受け止められることが誇らしさにつながる。(大分)
- リーダーの孤立解消。リーダーが様々なステークホルダーにかけあって活動を進めており、苦しかったが、それがメンバーから認められた。(大分)

図 5 参加者のワークショップによる意識変容

IOO 評価ワークショップの総合評価は、満足度、理解度並びに有効度とも全体および開催地別の平均値に大きな乖離がなく、分散分析 (5%水準) でも有意差は見られないので、6 回すべてのワークショップについて等価にデータを扱う。参加者の総合評価は5段階評価の平均値3に対して、満足度 = 4.48、理解度 = 4.38、有効度 = 4.55 といずれも高い水準にある(図6)。性別比較でもt検定(両側5%水準)で有意な差はない(図7)。

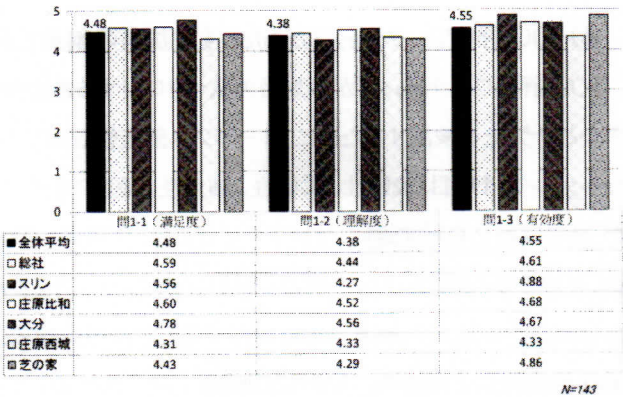


図6 IOOワークショップの総合評価

2) アウトカム可視化の有効性評価

「このワークショップに参加することによって何が見える化できるようになったのか」という設問で、見える化の対象として、①参加の目的(目的)、②何をしているか(機能)、③どんなことをしているか(ふるまい)、④どういう課題にチャレンジしているか(課題)、⑤ここで何を目指しているか(目標)、⑥外向きにどのように説明できるか(説明)の6項目を提示した。

図8に示す通り、総じて女性参加者の方が男性参加者よりも0.5～1.0ポイントほど高い評価であった。t検定(両側5%)により、目的、機能、目標並びに説明において有意な差が見られた($p < 0.0282$)。

また、年齢からみても、すべての年代で概ね高い評価が得られた(図9)。目的、ふるまい、課題及び説明については、年齢間で有意な差が見られなかった。他方、機能と目標については、60歳代から70～80歳代のシニア層の評価が相対的に低く、分散分析($p=5\%$)で有意差がある($p < 0.0295$)。従って、シニア層については、機能と目標の観点でのアウトカムの可視化を、ほかの年代ほどには強く実感できなかったと言えよう。

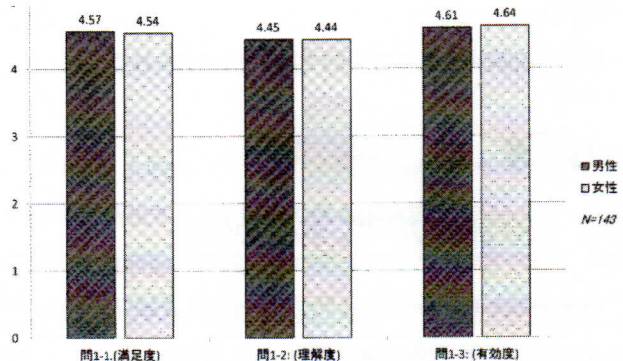


図7 総合評価の男女比較

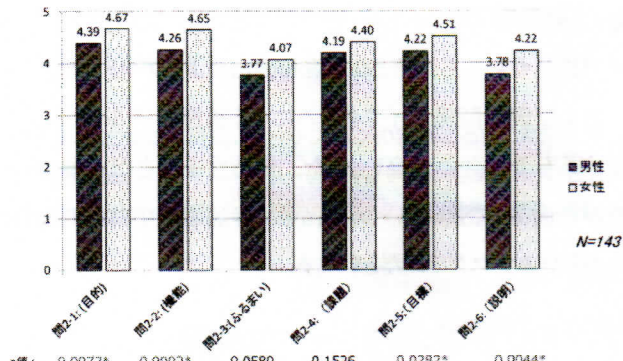


図8 アウトカムの向上(性別)

3) ワークショップ構成の有効性評価

IOO 評価ワークショップの6つのプロセスを構成する7つのワーク等⁴⁾、すなわち①目的説明、②アイスブレイク、③オブザベーション(フィールドワーク)、④ブレインストーミング、⑤親和図作成、⑥因果関係ダイアグラム作成、並びに⑦プレゼンテーション、について、気づきがあったものを複数選択可能な設問とした。

図10のとおり、アンケートの結果、親和図法55.23%と因果ループ図56.36%を最大にワークショップの中盤以降で有効性を評価する割合が高く、t検定(両側5%)により全体平均値34.98%に対して有意な差が見られる($p < 0.0305$)。すなわち、表出したアウトカムをやや抽象度を上げながら構造化する段階と、その結果を因果ループに組み込みながら自分たちで因果関係を明らかにしていく過程が、参加者にとって非常に満足度の高い構成であったと言える⁶⁾。

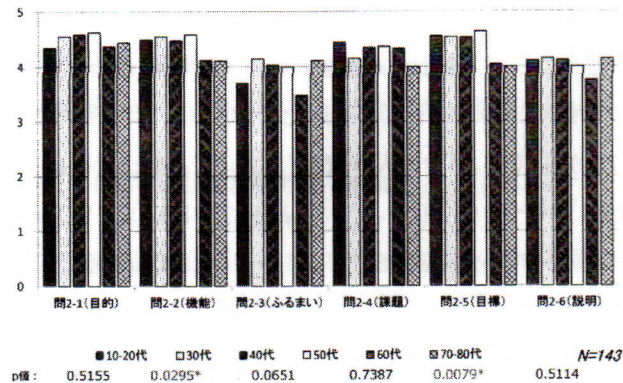


図9 アウトカムの向上(年代別)

4) IOO 評価ワークショップがもたらす参加者の創造性評価

IOO 評価ワークショップが参加者の気づきに対する創造性をどう増すかということを検証するために、トールンス創造性評価におけるイノベーションの4項目(流暢性、柔軟性、独自性、並びに新規性)を用いた。結果は表2に示す通り、すべての項目において既存の会議形態よりも有効であると評価され、t検定(両側5%)により有意な差が見られた($p < 0.05$)。さらに、4つの項目間でのピアソン相関係数Rと、p値(t検定片側5%)から、流暢性と独自性、創造性と独自性、独自性と新規性との間に有意なピアソン相関が認められた(表3)。独自性、すなわち自分たちはオリジナルに考えられたのだという実感が、参加者の創造性を高める上で効果的であったと考えられる。

5 考 察

(1) IOO 評価ワークショップの特徴

参与観察とアンケートの結果から、「IOO 評価ワークショップ」の有効性が示された。総合的な満足度が高く、自分たちの活動の目的や成果などがよく可視化されたと感じられていることから、参加した団体にとって効果的なワークショップであったといえる。ワークショップ構成の妥当性についても、核となる親和図法によるアウトカムのグルーピングおよび因果関係ダイアグラムによる論理モデル作成のステップに対する有効性評価が高い。また、創造性を引き出す要素のうち独自性が要因として強いという結果から、参加者が主体的に独自の気づきを得られるプログラムだといえる。

(2) IOO 評価ワークショップの効果

IOO 評価ワークショップのこうした特徴は、参加者のどのような気づきや変化をもたらしているかについて、参与観察から得られた、①これまでの行動の客観化、②自らの活動への自己肯定感、③新たな行動へのモチベーション、そして④ IOO 評価そのものの効用という参加者の様子と照らし合わせて分析する。

まず、これまでの行動の客観化については、自分たちの活動の目的や成果が適切に可視化されることが客観的な理解につながっている。自分の人件費もインプットであるという認識や他の異なる分野で活動する団体と地域に対する想いが同じだったという気づき(庄原)は、インプットからアウトカムまでを丁寧に可視化することで得られる効果である。

次に、アウトカムを客観化してストーリーとして語れるようになることが、自己肯定感につながっている。自分のストーリーが承認されることが誇らしさにつながる(大分)といった感想はよく聞かれ、ワークショップを通じて自信を得る参加者は多かった。そして、こうしたプロセスを、外部からの評価ではなく、対話を通して自分たちで考えることによって、あらたな意欲が生まれたり、次のアクションにつながったりしていると考えられる。

さらに、実施すること自体による派生的な効果やワークショップ手法の構造的な効果もある。例えば、リーダーだけがこれまで持っていた知識がワークショップで共有され、メンバーそれぞれが活動に誇りを持てるようになったり(大分)、対話型で進めることで意識が共有されたり(総社)という効果は、ワークショップの内容として直接扱われるわけではないが、ワークショップそのものを通して構造的に生み出されるメリットである。

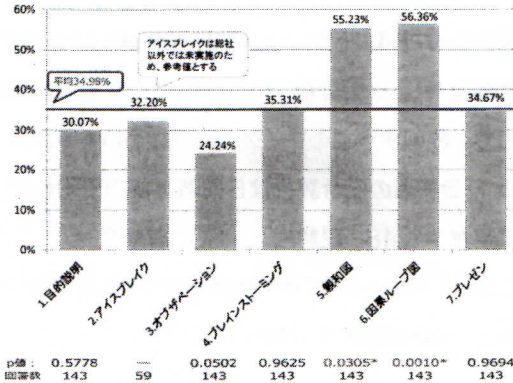


図 10 IOO ワークショップ構成の有効性評価

表 2 「イノベーションの4項目」での有効性評価

	問5-1: 流暢性	問5-2: 柔軟性	問5-3: 独自性	問5-4: 新規性
データ数	132	135	135	132
比較値	3	3	3	3
平均値	4.3939	4.3926	4.0741	4.3485
標準偏差	0.6937	0.5975	0.6845	0.6740
有意水準	0.025	0.025	0.025	0.025
p値	$p < 0.00001$	$p < 0.00001$	$p < 0.00001$	$p < 0.00001$

表 3 「イノベーションの4項目」の相関関係

	相関関係	相関係数R	P(T<=t) 片側	有効性
1	流暢性:柔軟性	0.68248324	0.49325743	
2	流暢性:独自性	0.29012127	0.00009781	○
3	流暢性:新規性	0.46758064	0.29555496	
4	柔軟性:独自性	0.37542775	0.00003266	○
5	柔軟性:新規性	0.53002126	0.28687115	
6	独自性:新規性	0.39863540	0.00057258	○

6 結 論

(1) 結 論

本研究では、社会で人的ネットワークをベースとする団体が行う様々な活動を評価する際に、成果 (outcome) を定性的・定量的に可視化し評価として活用できるワークショップベースの自己評価フレームを IOO 評価として構築して提案し、都市型の地域の縁づくり・場づくり団体による地域住民・行政・団体間の対話によるつながり構築を事例に、その有効性を定性的及び定量的に検証した。国内外 6 都市で 6 回のワークショップを実施し、延べ 30 の都市型の縁づくり・場づくり地域団体から 143 名の参加者を対象にした調査から、IOO 評価ワークショップが、成果の可視化を効果的に実現することのできる満足度の高いプログラムであることが確かめられた。

(2) 今後の研究課題

都市を典型とする社会基盤を支えるコミュニティの共助・協創のために、人的ネットワークや交流プラットフォーム形成は今後ますます重要となろう。定量的な事業評価のみならず、社会活動団体が創生する、参加者の個人的実感をすくい上げ、多様なステークホルダーとの対話を通じた協創的な事業価値の特定が、社会活動の持続可能な発展のために必要である。今後は IOO 評価を方法論、実践的検証とともに継続的に発展させ、都市型縁づくり・場づくり団体以外のより多くの団体に提供し、活動支援及びプログラム改善に取り組む。またこれら団体のアウトカム創生の成功事例を取り上げることで、プログラムの有効性検証とともに、成功要因の分析ツールとして活用する。さらに国際協力やサービス事業といった他領域へ対象を拡大し、分析テーマについても応用的実践や業績報告書を通じた行政との対話ツールとしての応用⁷⁾等、実務的な業務支援への展開を図る予定である。

〔謝辞〕 本研究は JSPS 科研費 15K00679 及び 15K11973 の助成を受けた。また本研究のワークショップの実施に当り、大分みちくさこみち、NPO 法人吉備野工房ちみち、芝の家、庄原市西城及び比和自治振興区、タイ・アユタヤラーチャパット大学、並びに NPO 法人南小国まちづくり研究会「みなりんく」の関係者から貴重な協力と支援をいただいた。さらに本論文の査読に当り、2 名の匿名の査読委員から貴重なコメントをいただいた。記して謝意を表す。

〔受付 2015 年 6 月 30 日〕

〔受理 2015 年 8 月 22 日〕

〔注〕

- 1) これら団体の活動は、2011 年の東日本大震災を契機に注目を集めている〔倉原 2013; 中嶋 2014〕。都市型団体の都市型たるゆえは、これら団体が伝統的な地縁・血縁にもとづかない、都市に多く観察される橋渡し型ソーシャル・キャピタルを地域コミュニティに醸成する機能を果たすからである〔小長谷ら 2006; 金谷 2008〕。
- 2) 活動の担い手の多くは NPO、社会福祉法人、住民団体等で、福祉、まちづくり、教育等様々な領域で活動している。
- 3) 日本の NPO 法人 1 万 3 千団体のうち、年間予算規模 500 万円未満の団体が 60.1% を占めている (2007 年時点調査) 〔山内ら 2008:76-77〕。
- 4) ワークショップでは①～⑦の 7 つのワーク等が活用される。まず本体に入る前に①目的説明及び②アイスブレイクが行われる。ワークショップ本体に入り 1) から 6) までの 6 つのプロセスに応じて、1) インプットとアウトプットの共有では③オブザベーション (フィールドワーク)、2) アウトカムのブレインストーミングでは④ブレインストーミング、3) 親和図法によるアウトカムのグルーピングでは⑤親和図作成、4) 因果関係ダイアグラムによる論理モデル作成では⑥因果関係ダイアグラムの作成、5) 因果関係ダイアグラムの発表では⑦プレゼンテーション、の各ワークが行われ、6) リフレクションへとつながっていく。
- 5) ただし、タイ国スリンでのワークショップについては、言語等の違いもあり、満足度・理解度のみの調査とした。
- 6) アイスブレイクは総社市のみで実施し、他の開催地では時間的制約により割愛しているため参考値とする。
- 7) 2014 年 6 月 1 日に岡山県総社市で実施した IOO 評価をもとに、総社市市役所担当者との間で業績評価について予備的対話を 2015 年 6 月 4 日に実施している。

〔引用・参考文献一覧〕

- Arvidson, et al., 2010, 'The ambitions and challenges of SROI', Third Sector Research Centre Working Paper 49, Birmingham.
- 馬場英朗, 2013, 非営利組織のソーシャル・アカウンティング, 日本評論社。

- Bosch, Ockie, J.H., et al., 2013, 'Managing Complex Issues through Evolutionary Learning Laboratories', Systems Research and Behavioral Science, Volume 30, Issue 2, pp.116-135, March/April 2013.
- Bryson, J.M., et al., 2014, 'Public Value Governance', Public Administration Review, Vol.74, Issue 4, pp.445-456.
- Buchanan, R., 1992, 'Wicked Problems in Design Thinking', Design Issues, Vol.VIII, No.2 Spring 1992, pp.5-21.
- Dunleavy, P., et al., 2005 'New Public Management is Dead', Journal of Public Administration Research and Theory, 16: pp.467-494.
- Johansson-Sköldberg, U., et al. 2013, 'Design Thinking: Past, Present and Possible Futures', Creativity and Innovation Management, Vol.22 No.2, pp.121-146.
- 金谷信子, 2008, ソーシャル・キャピタルの形成と多様な市民社会, ノンプロフィット・レビュー, Vol.8 No.1, pp.13-31.
- 小長谷一之ら, 2006, まちづくりとソーシャル・キャピタル, 創造都市研究, 第1巻創刊号, pp.59-75.
- 倉原宗孝, 2013, 東日本大震災の復興過程にみる「新しい公共」の取り組みに関する考察, 日本建築学会技術報告集, 第19巻第41号, pp.309-314, 2013年2月.
- Legasto, A., et al., 1980, System Dynamics, New York: North Holland Pub. Co.
- 前野隆司(編著), 2014, システム×デザイン思考で世界を変える: 慶應SDM「イノベーションのつくり方」, 日経BP社.
- 前野マドから, 2014, 主観的幸福の4因子モデルに基づく人と地域の活性化分析, 地域活性研究, Vol.5, pp.41-50.
- Moore, M.H., 2014, 'Public Value Accounting: Establishing the Philosophical Basis', PAR, Vol.74, No.4, 465-477.
- 中嶋貴子, 2014, 東日本大震災における災害寄付の実態と課題, 大阪大学 OSIPP Discussion Paper: DP-2014-J-007.
- Osborne, S.P., 2006, 'The New Public Governance?', Public Management Review, Vol.8 Issue 3, 2006, pp.377-387.
- Pollitt, C. and Bouckaert, 2011, Public Management Reforms, Third Edition, Oxford, UK: Oxford University Press.
- 坂倉杏介ら, 2013, 「共同行為における自己実現の段階モデル」による「地域の居場所」の来場者の行動分析, 地域活性研究, Vol.4, pp.23-40.
- 坂倉杏介ら, 2015, 「共同行為における自己実現の段階モデル」を用いた協創型地域づくり拠点の参加者の意識と行動変化の分析, 地域活性研究, vol.6, 2015.
- Senge, P.M., 1990, The Fifth Discipline: the Art & Practice of the Learning Organization, New York: Currency Book, Doubleday.
- 津々木晶子ら, 2011, システムズアプローチによる住民選好の数量化見える化, 関東都市学会年報, 第13号, pp.110-116.
- 山内直人, 馬場英朗, 石田祐, 2008, NPO 法人の財政実態と会計的課題, 非営利法人研究学会誌, 第10号, pp.73-88.
- Yasui, T., 2011, 'A New Systems-Engineering Approach for a Socio-Critical System', Systems Engineering Journal, Vol.14 No.4, 2011, pp.349-363.
- Yasui, T., et al., 2014, 'Designing Critical Policy Infrastructures by Participatory Systems Analysis', International Journal of Critical Infrastructures, Vol.10 Nos.3/4, 2014, pp.334-346.
- 保井俊之, 2014, 集合知活用型オープンソース・インテリジェンス分析モデルの構築, インテリジェンス・マネジメント, Vol.5 No.1 2014, pp.35-46.